# 大伴旅人と梅花の歌

何　　蔚　泓

## 一　序

『万葉集』巻五に載っている大伴旅人の作だと言われた序文および三十二首の梅花の歌によると、天平２年（730）正月に、大宰府においては正月の饗宴として梅花の宴が開かれており、旅人をはじめ三十二人が饗宴に集まり、梅花を題材に短歌を詠んだのである。

序文が漢文によって書かれていることに加えて、『万葉集』においては梅花が歌の題材として舶来のものだと考えられているゆえに、従来の研究はほぼ中国文学からの影響にのみ注目してきた[1]。しかも、そうした影響研究が言語レベルの出典に止まっており、それらによっては三十二首の梅花の歌を饗宴歌群として適当にとらえることはむろん、その中の歌を個別に正しく理解することも困難である。一方、一部の研究では確かに「三十二首の梅花の歌」の作品自体に着眼しているが、中国文学要素が文化的環境として作品の生成に働いていたという万葉史の事実を無視しているので、歌の本義や歌群としての本質の解明が徹底的になされていないと思われる[2]。

拙論では万葉史の事実に基づき、梅花の歌の生成に働いた文化的環境の究明に向けて中国文学における関連詩文を考察しつつ、三十二首の梅花の歌についてその本義を考え、さらに一連なる歌群を本質からとらえようとしてみる。

## 二　「落梅の篇」と「園梅の賦」

序文の最後に「若非翰苑、何以攄情。詩紀落梅之篇。古今夫何異矣。宜賦園梅聊成短詠。」とあるように、大伴旅人は詩に「落梅之篇」があると指摘してい

る一方、「園梅」を詠もう（賦）と呼びかけている。これに対して、辰巳正明氏は三十二首の梅花の歌を「落梅の篇」と認定しており[3]、伊藤博氏は同歌群を「園梅の賦」と考えている[4]。同じ序文に基づいて研究がなされているが、梅花の歌の本義に対する指摘はこのように違っているのである。三十二首の梅花の歌はいったい「落梅の篇」なのか「園梅の賦」なのか、その解明に向けてここではまず中国詩文における「落梅の篇」と「園梅の賦」を考察しておく。

「落梅の篇」については、契沖の『万葉代匠記』によって『詩経』の「摽有梅」[5]と古楽府の「梅花落」[6]が指摘されて以来、関連研究においては「落梅」を詠む詩篇にするか楽府詩「梅花落」に特定するかによって結論が違っている。前者としては例えば武田祐吉氏が『玉台新詠』に載っている梁武帝の「春歌」を指摘しているが[7]、後者としては土屋文明氏がまた古楽府「梅花落」と違う楽府詩「梅花落」を三首指摘し[8]、さらに小島憲之氏が「落梅の篇」は六朝楽府一連の「梅花落」を指すという考えを示して[9]、古沢未知男氏が大量の詩例を挙げた上でほぼ同じ結論を出している[10]。その後の研究では、辰巳正明氏が序文における「落梅の篇」を「梅花落」と認めて、そして三十二首の梅花の歌を辺境の望郷詩という「梅花落」の性質と照合して、大宰府饗宴の梅花の歌を「旅人たちが望京の念をこめて歌った」ものと認定している[11]。

このように、「落梅の篇」についての理解は大宰府饗宴で詠まれた梅花の歌の本質解明にかかわっているのである。梅花の歌の本義をとらえるために、旅人が序文に書いた「落梅の篇」と楽府詩の「梅花落」とのかかわりを究明しておかなければならない。ここではまず、中国古典における梅花詩の考察を通して「落梅の篇」と「梅花落」とのかかわりを考えておく。ただ、万葉文人に読まれているだろうと思われる中国古典は通常だいたい初唐あたりまでのものと考えられている。ゆえに、以下の考察は初唐以前の中国詩文における梅花詩に限ることとする。

万葉時代には既に日本に伝わってきた『楽府詩集』や『玉台新詠』、『芸文類聚』、『初学記』などの中国典籍を調べてみると、「落梅」を詠む詩篇ではあるが楽府詩「梅花落」でないものが六朝詩に数多く存在している。例えば、

（1）梅花落已尽、柳花随風散。嘆我当春年、無人相要喚。（「春歌二十首」）

（2）杜宇竹里鳴、梅花落満道。燕女遊春月、羅裳曳芳草。（「春歌二十首」）

（3）適聞梅作花、花落已成子。杜宇繞林啼、思从心下起。（「孟珠歌」）

（4）新葉初冉冉、新蕊初霏霏。逢君後園讌、相随巧笑婦。親労君玉指、摘以贈南威。用持插雲髻、翡翠比光輝。日暮長零落、君恩不可迫。（謝眺「雑咏五首・落梅」）

（5）菟園標物序、驚時最是梅。銜霜当路発、映雪擬寒開。枝横却月観、花繞凌風台。朝洒長門泣、夕駐臨邛杯。応知早飄落、故逐上春来。（梁・何遜「咏早梅詩」）

（6）……。春風吹梅畏落尽、賤妾為此斂娥眉。花色持相比、恒愁恐失時。（梁・簡文帝「梅花賦」）

（7）可怜階下梅、飄蕩逐風回。度簾払羅幌、熒窗落梳台。乍随纖手去、還因插鬢来。客心屡看此、愁眉斂詎開。（梁・鮑泉「咏梅花詩」）

（8）光景斜漢宮、横梁照采虹。春情寄柳色、鳥語出梅中。氛氳閨里思、逶迤水上風。落花徒入戸、何解妾床空。（梁・蕭子范「春望古意詩」）

（9）春近寒雖転、梅舒雪尚飄。従風還共落、照日不倶銷。葉開随足影、花多助重条。今来漸異昨、向晩判勝朝。（陳・陰鏗「咏雪里梅詩」）

（10）天遊御蹕駐城闉、上苑遅光晩更新。瑶台半入黄山路、玉欄傍臨玄灞津。梅香欲待歌前落、蘭気先回酒上春。幸預玉台称献寿、愿陪千畝及農辰。（盧蔵用「奉和立春遊苑詩」））

（11）竟日会春台、芙蓉承酒杯。水流平澗下、山花満谷開。行雲数番過、白鶴一双来。水影揺藂竹、林香動落梅。直上山頭路、羊腸能幾回。（庾信「咏画屏風詩二十五首」之二十五）

（12）香清寒艶好、誰惜是天真。玉梅謝後陽和至、散与群芳自在春。（隋・侯夫人「春日看梅詩二首」之二）

（13）春庭聊縦望、楼台自相隠。窓梅落晩花、池竹開初笋。泉鳴知水急、雲来覚山近。不愁花不飛、到畏花飛尽。（隋・蕭悫「春晩庭望詩」）

などが挙げられる[12]。字数の制限で以上の詩について一々詳しく説明することを省かせていただき、そられに表れた「落梅」すなわち梅の花が散りつつある光景に対する情感をまとめておく。おおざっぱに分類すると、上記の詩におけ

る「落梅」は次のように扱われていると考えられる。まず、梅の花が散ることは女性の恋心を起こす機縁とされており、例えば（1）（3）（6）（8）はこの類で、『詩経』「摽有梅」以来の伝統を汲んでいる。次に、梅の花が散りつつある光景は初春の風景として観賞されており、例えば（9）(10)（11）(12)（13）はこの類で、「落梅」は賞美の対象とされている。さらに、（2）（4）（5）（7）では散った梅の花が野遊びの人々に飾りとして髪に插されており（「插雲髻」「插鬢来」)、「落梅」は賞翫の対象とされている。このように、中国詩文の「落梅の篇」においては「落梅」に女性の恋心や初春の悦び、野遊びの愉悦が込められているのである。

また、『楽府詩集』には南朝文人の手によった楽府詩「梅花落」が13首収められている。

（1）中庭雑樹多、偏為梅咨嗟。聞君何独然、念其霜中能作花、露中能作実。揺蕩春風媚春日、念爾零落逐風飆、徒有霜華無霜質。（宋・鮑照）

（2）隆冬十二月、寒風西北吹。独有梅花落、飄蕩不依枝。流連逐霜彩、散漫下冰澌。何当与春日、共映芙蓉池。（梁・呉筠）

（3）金砌落芳梅、飄零上鳳台。拂粧疑粉散、逐溜似萍開。映日花光動、迎風香気来。佳人早插髻、試立且徘徊。（陳・後主）

（4）楊柳春楼辺、車馬飛風煙。連娉烏孫伎、属客単于毡。雁声不見書、蚕糸欲断弦。欲持塞上蕊、試立将軍前。（前と同じ）

（5）対戸一株梅、新花落故栽。燕拾還蓮井、風吹上鏡台。倡家怨思妾、楼上独徘徊。啼看竹葉錦、参罢未成裁。（陳・徐陵）

（6）中庭一樹梅、寒多葉未開。只言花是雪、不悟有香来。上郡春恒晩、高楼年易催。織書偏有意、教逐錦文回。（陳・蘇子卿）

（7）芳樹映紅野、発早覚寒侵。落遠香風急、飛多花逕深。周人嘆初摽、魏帝指前林。辺城少灌木、折此自悲吟。（張正見）

（8）縹色動風香、羅生枝已長。夭姫墜馬髻、未插江南璫。転袖花粉落、春衣共有芳。羞作秋胡婦、独采城南桑。（江総）

（9）胡地少春来、三年驚落梅。偏疑粉蝶散、乍似雪花開。可怜香気歇、可惜風相摧。金鐃且莫韵、玉笛幸徘徊。（前と同じ）

(10) 腊月正月早驚春、衆花未発梅花新。可怜芬芳臨玉台、朝攀晩折還復開。長安少年多軽薄、両両常唱梅花落。満酌金巵催玉柱、落梅樹下宜歌舞。金谷万株連綺甍、梅花密処藏嬌鶯。桃李佳人欲相照、摘葉牽花来併笑。楊柳条青楼上軽、梅花色白雪中明。横笛短簫凄復切、誰知柏梁声不絶。(前と同じ)

(11) 梅嶺花初発、天山雪未開。雪処疑花満、花辺似雪回。因風入舞袖、雜粉向粧台。匈奴几万里、春至不知来。(唐・盧照隣)

(12) 鉄騎幾時回、金閨怨早梅。雪中花已落、風暖葉応開。夕逐新春管、香迎小歳杯。感時何足貴、書里報輪台。(唐・沈佺期)

(13) 新歳芳梅樹、繁花四面同。春風吹漸落、一夜幾枝空。小婦今如此、長城恨不窮。莫将遼海雪、来比後庭中。(唐・劉方平)

『楽府詩集』巻二十四によると、「梅花落」はもともと笛曲の曲名だと言われており[13]、また南朝・沈約『宋書・楽志』では笛は北方民族の楽器だと記している[14]。そして、『楽府詩集』では「梅花落」が北朝楽府の「漢横吹曲」という部類に収められている。故に、楽府詩「梅花落」は北方の辺地と由縁深いものと考えればいいのである。一方、上記の「梅花落」詩篇を実際に考察してみると、次のような主題が読み取れるものはほとんどである。第一、梅の花に士の精神が譬えられているもの。「梅花落」に占める量は少ないが、例えば（1）「念其霜中能作花、露中能作実」（2）「独有梅花落、飄蕩不依枝」はこの類である。第二、遠隔の故郷を懐かしがるといった辺境の兵士の心が詠まれているもの。上記の「梅花落」の半分ぐらいを占めており、例えば（4）「連娉烏孫伎、属客単于毡。雁声不見書、蚕糸欲断弦」（6）「上郡春恒晩、高楼年易催。」（7）「辺城少灌木、折此自悲吟」（9）「胡地少春来、三年驚落梅」(11)「梅嶺花初発、天山雪未開」はこの類である。第三、辺境へ赴いたままの夫君の帰来を待ち遠しがるといった「思婦」の哀れが詠まれているもの。内容としては前類と対照となっており、量も前類とほぼ同じで、（3）「佳人早插髻、試立且徘徊」（5）「倡家怨思妾、楼上独徘徊」（8）「羞作秋胡婦、独采城南桑」(12)「鉄騎幾時回、金閨怨早梅」(13)「小婦今如此、長城恨不窮。莫将遼海雪、来比後庭中」などが挙げられる。このように、上記の（1）と（2）以外、『楽府詩集』に収めら

れた「梅花落」には辺境に身を置いた兵士の望郷の念や彼らの帰来を待ち焦がれる「思婦」の哀れが込められているのである。

ここまでは初唐以前の中国詩文における「落梅の篇」と楽府詩「梅花落」を考察してきた。前者と後者についての分析を比べてみたら分かるように、「落梅の篇」と楽府詩「梅花落」は明らかに同質のものではないと言える。楽府詩「梅花落」では兵士の望郷の念や「思婦」の哀れを詠んだものがほとんどであり、やや暗い哀情を基調としている。それに対して、「落梅の篇」では女性の恋心にせよ初春の悦びにせよ野遊びの愉悦にせよ、その「落梅」にはめでたくて喜ばしい新春の情緒があふれている。しかも、詩の内容から見ると、女性の恋心も初春の悦びも共に春季の野遊びから生じたのだと言える。ある意味では、「落梅の篇」はすべて「初春の野遊び」を主題としていると言ってもいいのだろう。

序文の結びとして旅人はまず「若非翰苑、何以攄情。詩紀落梅之篇。古今夫何異矣」と指摘して、さらに饗宴の出席者に対して「宜賦園梅聊成短詠」と唱えている。序文から見ると、梅花の歌宴の主調は「園梅の賦」に定められているようである。故に、梅花の歌三十二首を読み解かすには、また「園梅の賦」というものの性質、さらに前文に考察した「落梅の篇」と楽府詩「梅花落」との関係を究めておかなければならない。

初唐以前の中国詩文を調べてみたら、「散った梅」を詠んだ「園梅の賦」以外、ほかに「園梅」を題材とする詩も大量に散在しており、おおまかに次のように分類することができる。

第一、春の到来を詠むもの。例えば、

（1）菟園標物序、驚時最是梅。……。（梁・何遜「咏早梅詩」）

（2）春从何処来、払水復驚梅。……。（梁・呉筠「春詩」）

（3）迎春故早発、独自不疑寒。畏落衆花後、無人別意看。（陳・謝燮「早梅詩」）

（4）梅花特早、偏能識春。……。（梁・簡文帝「梅花賦」）

（5）春色暎空来、先発院辺梅。……。（梁・簡文帝「采桑詩」）

（6）昨暝春風起、今朝春気来。鶯鳴一両囀、花樹数重開。散粉成初蝶、剪彩作新梅。游客傷千里、無暇上高台。（周・宗懐「早春詩」）

（7）砌雪無消日、卷簾時自犟。庭梅対我有怜意、先露枝頭一点春。（侯夫人「春日看梅詩二首」之一）

（8）四時運灰琯、一夕変冬春。送寒余雪尽、迎歳早梅新。（唐太宗「於太原召侍臣賜宴守歳詩」）

（9）寒随窮律変、春逐鳥声開。初風飄帯柳、曉雪間花梅。碧林青旧竹、緑沼翠新苔。芝田初雁去、綺樹未鶯来。（唐太宗「首春詩」）[15]

などが挙げられる。『初学記』巻三の「歳時部」によると、「『夏小正』曰、正月啓蟄。……農及雪、澤采芸。柳稊。梅、杏、柂桃則華。」とある。すなわち、梅は最も早く春の到来を告げる花だと言われている。故に、「園梅の賦」においては梅の花が春の到来を告げるものとして詠まれているわけでる。また、鶯が春の到来を告げる鳥とされているので、梅と鶯との組合せも春の到来を詠む「園梅の賦」の特徴の一つと考えられる。上記の詩を見ても、例えば（6）の「鶯鳴一両囀、花樹数重開」および（9）の「芝田初雁去、綺樹未鶯来」はその例にあたる。梅と鶯との組合せは万葉文人にも好まれていたようで、梅花の歌三十二首には何首か見られるが、次の節で詳しく説明する。

第二、新春の遊びとして「梅の花見」を詠むもの。例えば、

（1）璇閨玉墀上椒閣、文窗綉戸垂綺幕。中有一人字金蘭、被服纖羅蘊芳藿。春燕差池風散梅、開帷対影弄禽雀。……。（宋・鮑照「行路難四首」の四）

（2）献歳発、吾将行。春山茂、春日明。園中鳥、多嘉声。梅始発、柳始青。泛舟艫、斉棹驚。奏采菱、歌鹿鳴。風微起、波微生。弦亦発、酒亦傾。入蓮池、折桂枝。芳袖動、芬葉披。両相思、両不知。（宋・鮑照「春日行」）

（3）……想緑萍兮既冒沼、念幽蘭兮已盈園。夭梅晨暮発、春鶯旦夕喧。青苔蕪石路、宿草塵蓬門。……（宋・謝庄「懐園引」）

（4）朱日光寒氷、黄花映白雪。折梅待佳人、共迎陽春月。（梁武帝「子夜四時歌・春歌」）

（5）扶道覓陽春、相将共携手。草色猶自腓、林中都未有。無事逐梅花、空交信楊柳。且復帰去来、含情寄杯酒。（梁・沈約「詠春初詩」）

（6）昨日看梅樹、新花已自生。今旦聞春鳥、何啻両三声。凍解池開緑、雲穿天半晴。遊心不応動、為此欲逢迎。（梁・簡文帝「春日看梅詩」）

（7）土膏春気生、倡女協春情。魚遊連北水、鵠作遼東鳴。折梅還插鬢、蕩柱更移声。銀燭含朱火、金炉対宝笙。百枝凝夕焔、却月隠高城。（梁元帝「亀兆名詩」）

（8）新鶯隠葉囀、新燕向窗飛。柳絮時依酒、梅花乍入衣。玉珂逐風度、金鞍照日暉。無令春色晩、独望行人帰。（梁・孝元帝「春日詩」）

（9）風光今旦動、雪色故年残。薄衣迎新節、当炉却晩寒。故香分細煙、石炭搗軽紈。竹葉裁衣帯、梅花奠酒盤。年芳袖里出、春色黛中安。……。（陳・徐陵「春情詩」）

（10）昨夜鳥声春、鶯鳴動四隣。今朝梅樹下、定有折花人。（周・庾信「詠春詩」）

（11）城傍金谷苑、園里鳳凰池。細管調歌曲、長衫教舞児。向人長曼臉、由来薄面皮。梅花絶解作、樹葉本能吹。香煙龍口出、蓮子帳心垂。莫畏無春酒、須花但見随。（庾信「奉和趙王春日詩」）

（12）睿賞葉春芳、開筵臨画堂。庭梅飄早素、檐柳変初黄。八珍羅玉俎、九醞湛金觴。箏響流飛閣、歌塵落妓行。何必西園夜、空承明月光。（隋・劉端和「初春宴東堂応令詩」）

（13）悒然想泉石、駈駕出楼台。玩竹春前笋、驚花雪後梅。青山殊可対、黄卷復時開。長縄豈系日、濁酒傾一杯。（隋・江総「歳暮還宅詩」）

（14）絶訝梅花晩、争来雪里窺。下枝低可見、高処遠難知。定須還翦采、学作両三枝。（梁・簡文帝「雪里覓梅花詩」）

（15）春近寒雖転、梅舒雪尚飄。従風還共落、照日不倶銷。葉開随足影、花多助重条。今来漸異昨、向晩判勝朝。（陳・陰鏗「咏雪里梅詩」）

（16）水泉猶未動、庭樹已先知。翻光同雪舞、落素混氷池。……。（梁・王筠「和孔中丞雪里梅花詩」）

（17）窗梅朝始発、庭雪晩初消。折花牽短樹、幽叢入細条。垂氷溜玉手、含刺冒春腰。遠道終難寄、馨香徒自饒。（梁・庾信「同蕭左丞詠摘梅花詩」）

（18）常年腊月半、已覚梅花蘭。不信今春晩、倶来雪里看。樹動懸氷落、枝

高出手寒。早知覓不見、真悔着衣単。(周・庾信「詠梅花詩」)

(19) 年柳変池台、随堤曲直迴。逐浪聯陰去、迎風帯影来。疏黄一鳥僧、半翠几眉開。熒雪臨春岸、参差間早梅。(唐太宗「詠春池柳詩」)

(20) 歳陰窮暮紀、献節啓新芳。冬尽今宵促、年開明日長。氷消出鏡水、梅散入風香。対此歓終宴、傾壺待曙光。(唐太宗「守歳詩」)

などが挙げられる[16]。梅を題材とする詩文においては「梅の花見」を詠むものが最も多く、しかも内容も豊かである。最もよく見られるのは「落梅」を詠むもので、前文に既に数多く挙げられているが、他に(1)の「春燕差池風散梅、開帷対影弄禽雀」と(20)の「氷消出鏡水、梅散入風香」もその類である。次には梅を他の風物と組合せて詠むものも少なくない。中でも最も多いのは「梅と雪」の組合せで、(13)「玩竹春前笋、驚花雪後梅」(14)「絶訝梅花晩、争来雪里窺」(15)「春近寒雖転、梅舒雪尚飄」(16)「翻光同雪舞、落素混氷池」(17)「窗梅朝始発、庭雪晩初消」(18)「常年腊月半、已覚梅花蘭。不信今春晩、倶来雪里看。」などが挙げられる。次に多いのは「梅と柳」の組合せで、(2)「梅始発、柳始青」(5)「無事逐梅花、空交信楊柳」(8)「柳絮時依酒、梅花乍入衣」(12)「庭梅飄早素、檐柳変初黄」などがある。さらに「梅と鶯」の組合せも2例見られ、(3)「天梅晨暮発、春鶯旦夕喧」と(6)「昨日看梅樹、新花已自生。今旦聞春鳥、何啻両三声。」である。また、「梅の花見」として「花を折って賞翫すること」を内容とする詩も見られる。例えば、(4)「折梅待佳人、共迎陽春月」(7)「折梅還插鬢、蕩柱更移声」(10)「今朝梅樹下、定有折花人」(17)「折花牽短樹、幽叢入細条」などが挙げられる。さらに、花見に欠かせぬものとして「春酒」を詠むものも数多く存在する。(2)「弦亦発、酒亦傾」(5)「且復帰去来、含情寄杯酒」(9)「竹葉裁衣帯、梅花奠酒盤」(11)「莫畏無春酒、須花但見随」(12)「八珍羅玉俎、九醞湛金觴」(13)「長縄豈系日、濁酒傾一杯」(20)「対此歓終宴、傾壺待曙光」などが挙げられる。以上のとおり説明してきた「落梅」、「梅と雪」「梅と柳」「梅と鶯」といった組合せ、「花を折って賞翫すること」および「お酒」はすべて太宰府の梅花の歌群にも見られるが、両者の異同は次の節で詳しく論述する。

第三、「恋しい心持ち」を詠むもの。例えば、

（1）気暄動思心、柳青起春懐。時艶怜花蘂、服浄悦登台。提觴野中飲、愛心煙未開。露色染春草、泉源潔氷苔。泥泥濡露条、尿尿承風栽。鳧雛掇苦蕎、黄鳥銜桜梅。解衿欣景預、臨流競覆杯。美人竟何在、浮民空自摧。（宋・鮑照「三日詩」）

（2）春从何処来、払水復驚梅。雲彰青鎖闥、風吹承露台。美人隔千里、羅帷閉不開。無由得共語、空対相思杯。（梁・呉筠「春詩」）

（3）楊柳葉纖纖、佳人懶織縑。正衣還向鏡、迎春試挙簾。摘梅多繞樹、覓燕好窺檐。只言逐花草、計校応非嫌。（梁・簡文帝「春閨情詩」）

（4）梅含今春樹、還臨光日池。人懐前歳憶、花発故年枝。（梁元帝「咏梅詩」）

（5）粧鉛点黛払軽紅、鳴環動佩出房櫳。看梅復看柳、泪満春衫中。（王淑英婦「贈答詩」）

（6）山中多早梅、荊扉達曙開。竹巾君自折、荷衣誰為裁。行雲無処所、人住在陽台。（陳・李爽「山家閨怨詩」）

などが挙げられる[17]。詩例（1）の冒頭が示したとおり春は「動思心」「起春懐」（恋しい心持ちを起こす）という季節で、梅は春の到来を告げる花として、「恋しい気持ち」が込められるのも当たり前であろう。本節の前半に挙げた「落梅の篇」にも同じような主題のものが含まれており、「落梅の篇」を含む「園梅の賦」においては「恋しい心持ち」が通常の主題の一つと考えてよいようである。

ここまでは初唐以前の中国詩文における「梅」を題材とした作品について考察してきた。まとめてみるとまず、「落梅の篇」は楽府詩「梅花落」と全く異質のものだと言える。それから、落梅を詠む「落梅の篇」は「園梅の賦」の一種だと分かる。さらに言うと、「梅花落」に溢れている哀傷と違って、「落梅の篇」を含む「園梅の賦」はほぼ「春の到来」や「梅の花見」、「恋しい心持ち」を主題としており、新春の喜ばしい雰囲気を基調としているのである。

## 三　「梅花の歌三十二首」考

「梅花の歌三十二首」について調べる時、少なくとも次のような要素は考えなければならないと思われる。一つは歌群が詠まれた場を記しておいた序文の

内容で、もう一つは梅花の歌の生成に働いた文化的環境としての中国関連詩文である。ここでは序文の内容と第二節で考察した結果に基づき、「梅花の歌三十二首」の性質を考えてみる。

序文の冒頭に「天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴會也」とあるように、三十二首の梅花の歌が詠まれた場はお正月に太宰府の官邸で行われた宴会においてである。序文だけから考えると、正月の饗宴において詠まれる歌なら、喜ばしい雰囲気のものが合理的であろう。まさに前文に挙げた「園梅の賦」のようなものである。

実際に作品を考察してみたら、三十二首の梅花の歌はほぼすべて前述したような「園梅の賦」の主題にはめることができる。

第一、春の到来を詠むもの。例えば、

正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招きつつ楽しきを経め（5・八一五）

梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき春来たるらし（5・八三四）

巻5の八一五番は歌群の冒頭の作で、澤瀉久孝氏の『万葉集注釈』では「梅を招く」作と言われているが、「迎春の作」といってもよかろう。新春を迎えた作を詠んだ後、新春の遊びが饗宴の主題となったであろうか、歌群の半分ぐらいは「梅の花見」を詠むものである。

第二、新春の遊びとして「梅の花見」を詠むもの。例えば、

梅の花咲きたる園の青柳は蘰にすべく成りにけらずや（5・八一七）

梅の花今盛りなり思ふどち插頭にしてな今盛りなり（5・八二0）

青柳梅との花を折り插頭し飲みての後は散りぬともよし（5・八二一）。

梅の花咲きたる園の青柳を蘰にしつつ遊び暮さな（5・八二五）

うち靡く春の柳とわが宿の梅の花とを如何にか分かむ（5・八二六）

春されば木末隠れて鶯ぞ鳴きて去ぬなる梅が下枝に（5・八二七）

人毎に折り插頭しつつ遊べどもいや愛づらしき梅の花かも（5・八二八）

梅の花折りて插頭せる諸人は今日の間は楽しくあるべし（5・八三二）

年のはに春の来らばかくしこそ梅を插頭して楽しく飲まめ（5・八三三）

梅の花手折り插頭して遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり（5・八三六）

春の野に鳴くや鶯懐けむとわが家の園に梅が花咲く（5・八三七）

春柳蘰に折りし梅の花誰か浮べし酒坏の上に（5・八四0）

梅の花折り插頭しつつ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ（5・八四三）

霞立つ長き春日を插頭せれどいや懐しき梅の花かも（5・八四六）

上に挙げた歌の内容では「梅の花見」として最も頻繁に詠まれたのは「梅を折って插頭にすること」や、「青柳を蘰にすること」、「酒を飲むこと」で、それぞれ8例、3例、3例とある。「梅を折る」とか「梅の花を折って插頭にする」といった風雅は前文に挙げた「園梅の賦」にもよく見られ、例えば「折梅還插鬢、蕩柱更移声”（梁元帝「亀兆名詩」）や、「乍随織手去、還因插鬢来」（梁・鮑泉「咏梅花詩」）、「折梅待佳人、共迎陽春月」（梁武帝「子夜四時歌・春歌」）、「今朝梅樹下、定有折花人」（周・庾信「詠春詩」）、「折花牽短樹、幽叢入細条」（梁・庾信「同蕭左丞詠摘梅花詩」）などが挙げられる。それから、「お酒を飲みながら梅の花見をすること」を内容とする2首では、八四0番は前文に挙げた「竹葉裁衣帯、梅花奠酒盤」（陳・徐陵「春情詩」）と同じ趣旨のものであり、八三三番は唐太宗の「守歳詩」（「氷消出鏡水、梅散入風香。対此歓終宴、傾壺待曙光。」）と同じく宴会の同座に歳末に楽しく飲酒しようと呼びかけたものである。ところが、調べた限りでは「青柳を蘰にすること」を詠む詩は梅花の詩文に全然見られず、柳を詠む詩文にも全く見当たらなかった。一方、『万葉集』では「蘰」の用例がわりと普通で、約30例あり、太宰府の梅花歌宴以前の用例は少なくとも1例ある[18]。しかし、「青柳を蘰にする」のは太宰府の梅花の歌宴が最も古くて、「梅を折って插頭にすること」を詠む歌も梅花の歌三十二首が最も古いのである。

第二節では「園梅の賦」における「梅の花見」に関して「梅の花が散る」や「梅の花を折る」、「お酒を飲みながら花見をする」、および「梅と柳」「梅と鶯」「梅と雪」といった組合せなどを指摘してみた。上の部分では梅花の歌群について「梅の花を折る」や「お酒を飲みながら花見をする」、「梅と柳」という組合せなどの内容を考察してみた。両者を比べてみたら、「梅と柳」という組合せにおいては詩と歌がだいぶ違っている。「梅と柳」を詠んだ4首の歌では、詩文に見られない「青柳を蘰にする」ことを詠んだものが3首もある。ここからする

と、梅花の歌の世界はただ漢詩文に基づいた虚構のものにすぎないと考えがたく、梅や柳は太宰府の庭園に実在するものと考えてよかろう。上述したような内容も示したとおり、梅や柳が植えられている「園」では、お正月の饗宴として旅人を含む官僚たちが梅の花や柳を折って遊んだりお酒を飲んだりしていた。梅花の歌群はまさにそのような迎春の悦びを歌に表現したものに違いない。ここから考えると、梅花歌群の中の「落梅」を詠む歌は楽府詩「梅花落」の世界から遠く、「園梅の賦」の世界に近いと言えよう。

梅花の歌群には「落梅」を詠む歌が12首あり、中でも「梅と鶯」を詠むものは5首（八二四・八三八・八四一・八四二・八四五)、「梅と雪」を詠むものは4首（八二二・八二三・八三九・八四四）ある。八一六番「梅の花今咲ける如散り過ぎずわが家の園にありこせぬかも」にも「散る」という語が見られるが、歌は梅の花が散らないように願っているもので、「落梅」を観賞の対象として詠むものではない。それから、既に挙げた八二一番「青柳梅との花を折り插頭し飲みての後は散りぬともよし」は柳や梅の花を插頭にしてお酒を飲む楽しさを詠んでいるが、梅が散ることに対しての態度はもう落梅観賞に近い。従って、主人である旅人はそれを引き受けて歌宴で初めて落梅を詠んだのである。「散り落ちた花」という鑑賞対象の新鮮さに刺激されたのか、旅人の後には10人も落梅を詠んでいた。ただ、旅人と同じく「落梅」を愛でた人もいれば、「散り落ちた花」を惜しんだ人もいる。一方、詩文の「落梅の篇」では、「散り落ちた梅の花」を惜しむものや「梅の花が散らないこと」を願うものがほぼ見当たらないどころか、「不愁花不飛、到畏花飛尽」（隋・蕭悫「春晩庭望詩」）のように花が散り尽きることを心配する詩作さえあった。しかし、「落梅」を観賞の対象とするにおいては、梅花の歌群の歌はやはり「園梅の賦」の詩作に似ており、楽府詩「梅花落」に込められた望郷の念から遠いようである。

第三、「恋しい心持ち」を詠むもの。例えば、

春さればまづ咲く宿の梅の花独り見つつや春日暮らさむ（5・八一八）

世の中は恋繁しゑやかくしあらば梅の花にも成らましものを（5・八一九）

春なれば宜も咲きたる梅の花君を思ふと夜眠も寝なくに（5・八三一）

春さらば逢はむと思ひし梅の花今日の遊びにあひ見つるかも（5・八三五）

これらの歌に関しては、中国詩文における「思春」を主題とする作品の影響が強いと言われているが、合理的に考えれば太宰圏の文人達は梅の「迎春花」という性質に対してかなりの認知があるはずで、梅から「思春」という情感が喚起されたのも当たり前であろう。故に、新春を祝う為の梅花の歌宴という場では恋歌も当然に登場したのである。

## 四　結　論

以上のとおり、まず梅花の歌の生成に働いた文化的環境の究明に向けて初唐以前の梅詩文を考察して、今までの研究において混乱した「梅花落」・「落梅の篇」・「園梅の賦」の関係を明らかにした。まず、楽府詩「梅花落」は梅詩文の中でも特殊のジャンルで、梅の花そのものを詠むのではなくて、梅の花に「望郷の念」といった決まった情感が込められるのが普通である。それから、「梅花落」以外の梅詩文はすべて梅の花そのものまたは関連した人間活動を表現したもので、総じて「園梅の賦」と称していいであろう。また、「園梅の賦」の主題はおおよそ「迎春」や「梅の花見」、「恋しい心持ち」という三類にまとめることができ、「落梅」を詠む「落梅の篇」は「散り落ちた梅の花見」を詠むもので、すなわち「園梅の賦」の一種といってよかろう。以上をさらにまとめていうと、つまり「梅花落」と「落梅の篇」は全く違うもので、「落梅の篇」は「園梅の賦」に属すのである。

それから、旅人の作といわれた漢文序に基づき、さらに初唐以前の梅詩文に関した考察を参考にして梅花の歌群の性格を巡って三十二首の歌を整理してみた。具体的な歌作の性格を分析してさらに序文の叙述と合わせて考えてみると、梅花の歌群は楽府詩「梅花落」の性格と異なって、和歌世界の「園梅の賦」と言っていいようなものである。確かに梅花の歌群には「落梅」を詠む歌がかなりの量あるが、なお三分の二ぐらいは「落梅」と無関係である。しかも、「落梅」を詠む歌もすべて「落梅」そのものを表現の対象として、「梅花落」に込められた望郷の念から遠いようである。

最後に一言を付け加えておくが、序文および旅人の歌が示したように旅人は特に「落梅の花見」に興味津々のようである。序文では「園梅」に関して特に

「落梅の篇」を指摘しており、歌宴では率先して「落梅」を対象として歌を詠んだのである。『万葉集』に載せた和歌に限っては、梅の花見を詠んだ歌は太宰府の梅花の歌群が最も早いのであり、梅の花見を和歌の世界に取り入れるにおいては旅人の貢献が大きかったに違いない。しかし、万葉文化にとっては旅人の貢献はきっとそれ以上だったであろう。梅花の歌宴にのみ限っていっても、少なくとも次の二点において万葉文化に斬新な自然観照を取り入れたのである。一つは「園」の植物の観賞、もう一つは「散り落ちた花」の観賞。

（本学専任講師）

注

1　契沖『万葉代匠記』、土屋文明『万葉集私記』、倉野憲司「万葉集五梅花の歌序の『詩紀落梅之篇』について」（国語と国文学三六巻二号）、小島憲之「万葉集と中国文学　との交流」『上代日本文学と中国文学　中』（塙書房、1964年）、古沢未知男「＜梅花の歌序＞と＜蘭亭集序＞」『漢詩文引用より見た万葉集の研究』（桜楓社、1964年）、中西進「大伴旅人」『万葉歌人論』（『万葉論集・第三巻』講談社、1995年）、中西進「六朝詩と万葉集――梅花の歌をめぐって――」『万葉と海彼』（『万葉論集・第三巻』講談社、1995年）、中西進「六朝風――旅人と憶良」『万葉集の比較文学的研究（上）』（『中西進万葉論集・第一巻』講談社、1995年）、辰巳正明「落梅の篇」『万葉集と中国文学』（笠間書院、1987年）、井村哲夫「蘭亭叙と梅花の歌序」『憶良・虫麻呂と天平歌壇』（株式会社翰林書房、1997年）など。

2　澤瀉久孝『万葉集注釈』、伊藤博「園梅の賦」『万葉集の歌人と作品』下（塙書房、1975年）、大久保広行「梅花の宴歌群考」（『都留分科大学研究紀要』九号）、後藤和彦「梅花の歌三十二首の構成」（伊藤博・稲岡耕二編『万葉集を学ぶ』有斐閣選書、1978年）、植垣節也「梅花の歌三十二首考」（『古典解釈論考』1984年、和泉書院）など。

3　「落梅の篇――楽府『梅花落』と大宰府梅花の宴――」（『万葉集と中国文学』笠間書院、1987年）

4　「園梅の賦」（『万葉集の歌人と作品』下、塙書房、1975年）

5　「今按、詩指摽有梅篇邪」。

6　李商隠「莫向樽前奏花落」天隠註「念爾零落逐風飈　徒有霜華無霜質」。

7　「蘭葉始満地　梅花已落枝　持此可憐意　摘以寄心知」（武田祐吉『万葉集全註釈』巻五）

8　「対戸一株梅　新花落故栽（徐陵「梅花落」）」、「金砌落芳梅　飄飄上鳳台（陳後主、同）」、「満酌金巵催玉柱　落梅樹下宜歌舞（江総、同）」（土屋文明『万葉集私記』巻五）

9　「『落梅之篇』私見」『国語と国文学』36巻6号。「天平期に於ける万葉集の詩文」『上代日本文学と中国文学　中』

10　「＜梅花の歌序＞と＜蘭亭集序＞」（『漢詩文引用より見た万葉集の研究』）

11　注3と同じ。

12　（1）（2）（3）は『楽府詩集』巻四十四・四十四・四十九、（4）は『玉台新詠』巻四、（5）（10）（13）は『初学記』巻二十八・二十四・三、（6）～（9）は『芸文類聚』巻八十六・巻三、（11）（12）は『先秦漢魏晋南北朝詩』北斉詩巻二・隋詩巻一にある。

13　『楽府詩集』巻二十四には「梅花落、本笛中曲也」とある。

14　『宋書・楽志』には「笛、案馬融『長笛賦』、此器起近世、出于羌中」とある。

15　（1）（6）（8）（9）は『初学記』巻二十八・三・四・四に、（2）～（5）は『芸文類聚』巻三・八十六・八十六・八十八に、（7）は『先秦漢魏晋南北朝詩』隋詩巻一を参照。

16　（1）（4）は『玉台新詠』巻九・巻十、（2）は『楽府詩集』巻六十五、（3）（5）（6）（7）（9）（14）（15）は『芸文類聚』巻六十五・巻三・巻三・巻五十六・巻十八・巻八十六・巻八十六、（8）（10）（12）（13）（16）～（19）は『初学記』巻三・巻三・巻十四・巻二十四・巻二十八、（11）は『先秦漢魏晋南北朝詩』北斉詩巻一、（20）は『初学記』巻四を参照。

17　（1）は『先秦漢魏晋南北朝詩』宋詩巻三、（2）（4）（6）は『芸文類聚』巻三・巻八十六・巻三十二、（3）（5）は『玉台新詠』巻七・巻十を参照。

18　巻3の四二三番。